

あそかビハーラ病院便り

む ゆ う じ ゆ

第 5 号

あそか

2015.6.1 発行 あそかビハーラ病院
〒610-0116 京都府城陽市奈島下ノ畔3-3
TEL 0774-54-0120 FAX 0774-54-0121
E-mail:kanwa@asokavihara.jp

あそかビハーラ病院は、この4月1日に緩和ケア病棟の認可を取得いたしました。

これもひとえに、地域の皆さまや各連携医療機関の皆さまのおかげと、心より感謝申し上げます。

あそかビハーラ病院の歩みを振り返りますと、2008年4月に有床診療所「あそかビハーラクリニック」として、ここ京都府城陽市に誕生いたしました。以来、京都府南部地域における緩和ケアを担い、地域に貢献する医療を目指してまいりました。

当院はこれまで、より充実した医療を実践するため、緩和ケア病棟の認可を目指してきました。昨年4月には病院化を果たし、今年2月にISO9001を取得。そしてこの4月、無事に緩和ケア病棟認可を正式に受けることができました。

有床診療所から緩和ケア病棟認可を受けた例はこれまでになく、仏教を基本理念とする独立型緩和ケア病棟としては全国でも初の試みになります。

緩和ケア病棟認可を取得いたしました

緩和ケア病棟認可は、私たちにとってゴールではなく、これから新たなスタートラインに立ちます。

今後の目標はまず第一に、がんによる苦痛を取り除く医療技術を極限まで磨きつつ、患者さんのQOLの向上に努めることにあります。人が人生の最期を迎えるにあたって、ただ虚しく死を待つのではなく、がんによって生じる痛みを最大限軽減し、その人がその人らしく生き抜けるように支えてまいります。このことは、あそか開院以来の変わらぬ目標でありますが、誠実さを要として、医療スタッフのスキル向上を妥協することなく目指します。そして患者さん、あるいはご家族の皆さまが、あそかに入院できて良かったと思っただけのように努めてまいります。また、各連携病院の皆さまが、あそかに紹介して良かっ

たと感じていただけるよう、ご期待にお応えしたく存じます。

目標の第二は、仏教を基本理念としたビハーラ病院として、医療と宗教の融合を目指してまいります。ともすれば閉鎖的になりがちな医療現場において、日本人の精神性に根差した僧侶の活動は、多くの患者さん・ご家族の心の支えとなります。生老病死の最前線の医療現場における僧侶の活動は、今後の仏教界にも大きな礎を築くものがあります。一方、医療者側にとっても、医療と宗教の融合は、未来の医療のあり方に新たな変革をもたらすものと期待されます。あそかビハーラ病院が、これからの医療と宗教の融合を目指す発信地の役割を果たしてまいります。

新たなスタートラインに立ち、気持ちを引き締め、地域に根差した医療を實踐してまいります。

今後とも皆さまのご指導ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

院 長

大嶋 健三郎

緩和ケア病棟認可を受けて

看護部長

新堀 いづみ

昨年4月に、診療所から病院へとより厳しい基準へランクアップしたあそかビハラー病院の次のステップが、「緩和ケア病棟としての認可」でした。この認可というのは、私たちが患者さんに提供する「緩和ケア」の内容が、国が定める緩和ケアの診療報酬として、「対価」であることを認めていただくということなのです。

もちろん、今までも私たちは基本理念の体現者として、私たちの専門知識と技術である「看護」を提供してきたことに変わりはありません。しかし、高い報酬を得るといことは、さらに良質な看護が要求されるということでもあります。

一般的に、緩和ケアをスタートさせるには、準備段階で「認可」を受け、よいドーン！のときには運用実績が始まる段階となります。しかし、当院では、看護を提供しながら認可の「整備」をしていかなければならない。まさに暗中模索、走りながら「光」だけを頼りに進んできました。

そして昨年度にはISO9001を取得し、緩和ケア病棟認可に向けての大きな課題をクリア。最短の実績でこの4月、認可を受けることができました。ようやくスタートラインです。

しかし、2008年に当院ができてからの7年間は決して無駄な時間ではありませんでした。長い助走期間であったかもしれませんが、試行錯誤しながら患者さん、ご家族とともに苦悩すること、私たちが本当に大切にしているべきものが、抽出されたように思います。

今年度の看護部の目標を以下のように掲げました。

- 1、患者さんを中心にぬくもりとおかげさまのホスピス・緩和ケアを提供します。
- 2、あそかビハラー病院のチームメンバーとして積極的にシステムマネジメントに参画します。

マネジメントに参画します。

私たちは、目の前の患者さんに、より専門的緩和ケアを提供していく看護部であることを目指し、同時に私たちの手であそかビハラー病院を、のちの時代につないでいきたいと思えます。

季節の野菜・あそか農園



↑病室から見える あそか農園の風景



←地産地消
自分で育て
自分で摘み
採れたての
お野菜は
格別の味です



→蕎麦を育てています。
1本分のお蕎麦しかできないかも…

当院では、ガーデニングや、畑での野菜づくりなどをする事ができます。4月から5月は、患者さんのリクエストでトマト、南京、ナス、唐辛子、蕎麦、そしてスイカを植えました。近頃は、毎日の水やりから一日が始まります。患者さんと一緒に畑を耕し、肥料を蒔き、苗を植え、できたものを一緒にいただきます。

自然に囲まれた当院では、鳥や昆虫たちも食べ物を目当てにやってきます。自然と共に生きること。旬のものをいただくこと。ゆったりとした時間が流れています。育て方をはじめ、様々なことを患者さん、ご家族さんから教えていただいております。何か新しいことをしてみよう、今までしてきたことを続けていきたい、そんなお気持ちをお手伝いたします。

コラム連載①

JR奈良線の「山城青谷」という小さな駅を降り、のどかな田園地帯を歩いていく。国道24号線に突きあたり、右に曲がると黄色い小さな平屋の「あそかビハラ病院」が見える。歩いて10分ほどの、私のいつもの通勤コースである。

毎朝出勤すると窓いっぱい広がる景色を見て一息つく。大好きな風景である。どの病室からも見えるこの景色を見あきることはない。右に宇治田原の澄んだ山、左には珍しい天井川の竹藪が広がる。そして中央には大きな空。毎日色を変え、私たちに何か人生を物語ってくれているようだ。

温かい春の日差しを感じるこの季節になるといつもAさんのことを思い出す。Aさんは50歳半ばの男性で、あそかに来られた時はすでに歩けずに終末期であった。

ある日、Aさんは珍しく車椅子に乗りたいたと希望された。一緒にテラスに出て景色を眺めた。

Aさんはか細い小さな声で私に語りかけてくれた。「看護師さん。今は病気で動かない身体やけれど、これでも昔は、なかなかいい時代もあってね。人から感謝されたこともあった。こうやって、あの山を見ていると昔のいい時代が甦ってくる。自然は優しいね」。しばらく山を眺めながらご自身の昔話を聞かせてくださった。その翌日、A

自然に囲まれ自分らしくいられる所

看護師長 吉田 厚子



↑カンファレンスで看護師の報告を聞く
吉田看護師長（左）

さんは亡くなられた。

毎日、都会の大坂から往復4時間、電車で揺られて通勤している。周囲からは「何しに行ってるの。よくやるわ」と笑われる。あそかに何かあるのだろうか。

あそかは、自然がいっぱいで人が自分らしくいられるとても珍しい医療機関かもしれない。豊かな自然、土の上に建った建物、ホールには阿弥陀さまがおられ、いつも私たちが優しく見守ってくださっている。スタッフは、医師、薬剤師、看護師、MSW、看護助手、事務、栄養士、ボランティア、そしてお坊さん。そのスタッフ々が毎日、一致団結して患者さんが喜んでくださるためならと、泣いて、笑って、喧嘩して、真剣に仕事をしている。そんなあそかの魅力に惹かれているのかもしれない。

(※当コラムは本願寺新報2014年4月10日号より転載させていただきました)

図書紹介



岩波新書
1535

岩波新書 『医と人間』

井村裕夫編

今年2月に岩波新書より、『医と人間』が上梓されました。内容は先制医療、iPS細胞、ロボット治療、災害医療、チーム医療など。執筆者は、各分野を代表して山中伸弥教授や日野原重明先生など11名が執筆されています。その中に当院長が「ホスピス・緩和ケア」くびハラ病棟くという内容で執筆を担当しております。ぜひご一読いただけましたら幸いです。

臨床宗教師研修の誕生 その目的と特色

龍谷大学教授 鍋島直樹

龍谷大学大学院実践真宗学研究科に「臨床宗教師研修」講座が昨年から開設されている。東日本大震災以降、宗教者の社会実践が注目される中で、悲しみに寄り添う宗教者を育てる同講座は各方面から注目を集めている。そこで今回、研修主任の鍋島直樹教授に「臨床宗教師研修の誕生—その目的と特色」と題して執筆してもらった。

(本原稿は本願寺新報5月20日号より転載)

宗派を超えて心のケアに

人は誰しも、その時代の悲しみと共に生きていく。臨床宗教師研修は、東日本大震災の悲しみに寄り添う宗教者の社会実践と浄土真宗のビハークラ活動の実績から誕生した。

臨床宗教師は、病院、社会福祉施設、被災地などの公共空間で、信徒の有無を問わず、分け隔てなく悲しみに寄り添う宗教者を指す。ケア対象者の人生

観や信仰を尊重して話を聴き、その苦悩があるがままに受け容れて、不安を少しでも和らげ、その人の生きる力を育む宗教者である。そして、自分の生きる意味とは何か、死後どうなるのかについて、相手と共に考えていく。宗教の勧誘を行わず、宗教宗派を超えた協力関係を構築して、心のケアを実践する。

東北大学が3年前に創設

臨床宗教師研修は、東北大学大学院文学研究科実践宗教学寄附講座として2012年4月、東北大学大学院文学研究科に設置されたのが最初。創設者の鈴木岩弓教授は「東日本大震災以後、日本中からさまざまな宗教者・宗教団体が積極的に被災者支援活動を行い、注目された。その中には、布教伝道を目的とせず、時には異なる宗教的背景をもつ宗教者同士が協同のもとで行う宗教的ケアの場が見られ、被災者に大



あそかビハークラ病院での昨年度の臨床実習。医療者と常駐僧侶が入院患者について真剣に話し合う姿を間近で見て、緊張する研修生たち（正面の作務衣姿）

きな勇気を与えた」、提唱者の岡部健医師は「戦後の日本では、宗教や死生観について語り、この暗闇に降りていく道しるべを示すことのできる宗教者が死の現場からいなくなってしまう。医療者とチームが組める宗教者が必要」と語っている。

岡部医師らの、医療者と宗教者が協力してがん患者や被災者を支援する

「心の相談室」が、東北大学の協力で臨床宗教師養成の寄附講座へと展開した。

龍谷大学でも昨年度に開設

2011年5月、東北大学での「心の相談室」開設シンポジウムで岡部医師、鈴木教授、東京大学の島菌進教授、



特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」での昨年度の臨床実習の様子。入所者と笑顔で談笑する研修生は、実習先で多くを学んだ

「グリーンフケア論研究」「ビハーラ活動論研究」などの講義で理論を学ぶ。そして、東日本大震災被災地の訪問、阪神淡路大震災遺族との交流、あそかビハーラ病院（緩和ケア）やビハーラ本願寺などの高齢者社会福祉施設、ヒロシマでの被爆者講話と交流、キリスト教聖職者との宗教者間交流など臨床実習は120時間に及ぶ。グルー

ブワーク、ロールプレイ、会話記録検討会、実習振り返りを重視する。反省を通して、自己を見つめ、自らの課題を知る時、前に向かって前進できるからである。

スピリチュアルな苦痛とは

スピリチュアルな苦痛は、老病死の苦しみが迫り、今までの自分でなくなっていく時に、「なぜ私がこんな目にあわなければならぬのか」「私の人生は何だったのだろうか」という生きる意味への問いとなつてあらわれる。仏教における「苦」の言語にあたるサンスクリット語「ドウフカ」は、「思いのままにならない」ことを意味する。まさに、自分が自分らしさをなくして、思いのままになれず、未解決な問題に心悩ませ、死後の不安から神や仏への救いを求める気持ちである。

そして、ケア、看取りとは何か。ケアの原点に、「何かをすることではなく、そばに置くことである」という言葉がある。絶望的な状況に置かれている人に、何もできなくてもそばに寄り添い、話を聞くだけで支えになることをこの言葉は教えている。

寄り添うとは、特別な技術や個人の

能力を役立てて、相手の心を聞き支えるのではない。言うに言えない人々の悩みに向き合い、その場にいることである。腹を据えて聞こうとすることである。

臨床宗教師は、一人ひとりの解決のつかない課題に向き合い、相手と共に答えを探す宗教者である。

研修先での一言を大切に

研修先の一つである「あそかビハーラ病院」の常駐僧侶、花岡尚樹さんからは、臨床宗教師が医療チームに加わるならば、最低限の医療知識が必要であるとして、「宗教者だから何かできるといふ考えは捨てるべきである」「患者と接して得られる情報は一部分。わずかな言葉や表情から相手の気持ち想像し、変化を敏感に察知しなければならぬ」と教えていただいた。

また、東北大学の谷山洋三准教授には、宗教者が寺院や教会で信徒に行う活動を「ホーム」、公共空間での多様な価値観をもつ人々一人ひとりを尊重する活動を「アウェイ」と例え、「ま

上智大学グリーンフケア研究所の高木慶子所長から「一緒に」と声をかけられた。実践真宗学研究科の目標は、仏教の人間観・世界観、親鸞聖人の教学を依りどころに、世界の課題解決を目指して苦悩の現実に向き合い、一人ひとりの存在意味を再確認し、生きる力を育んでいくことができるような宗教的実践者を養成することである。これは東北大学寄附講座の教育目標と軌を一にする。

東北大学は「臨床宗教師」の認証を一大学で独占せず、「臨床宗教師」を全国で養成してほしいという志願があった。これに感銘し、「臨床宗教師」を龍谷大学大学院でも養成することになった。

龍谷大学の臨床宗教師研修は、①「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上②「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上③自らの死生観と人生観を養う④宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ⑤幅広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ、を目的としている。

「グリーンフケア論研究」「ビハーラ活動論研究」などの講義で理論を学ぶ。そして、東

日本大震災被災地の訪問、阪神淡路大震災遺族との交流、あそかビ

ハーラ病院（緩和ケア）やビハーラ本願寺など

の高齢者社会福祉施設、ヒロシマでの被爆者講

話と交流、キリスト教聖職者との宗教者間交

流など臨床実習は120時間に及ぶ。グルー

ブワーク、ロールプレイ、会話記録検討会、実習振り返りを重視する。反省を通して、自己を見つめ、自らの課題を知る時、前に向かって前進できるからである。

そのため自らの宗教的信仰が曖昧だと誤解を受けやすい。芯があつて、揺れる竹のような人こそ、臨床宗教師にふさわしい」と提言いただいた。

第1期生が社会実践の場へ

昨年度の第1期は111人が修了し、今年度は10人の大学院生と社会人応募からの3人（浄土宗僧侶を含む）が研修している。

第1期修了生は「社会実践の言葉にとらわれていたことに気付いた。仏より恵まれた信心をよるこび、まず相手が何を求めているのかを尊重したい。御同朋として社会福祉施設の現場に入り、臨床宗教師として活動していきたい」「目の前で涙し、苦悩されているのに何もできない自分だったが、この研修を通して、何もしない無力と自分から動く無力とは全く違うことを教わった。現場で寄り添うことは何か、自分ができるとは何かを模索しながら学びを深めていきたい」と語っている。

この修了生からは、臨床宗教師として田中至道さん（沼口病院）、柱本惇さん（社会福祉法人常清の里）が活動するほか、大阪市職員などとしても社会で活躍してくれている。

臨床宗教師の理念とは

実践真宗学における臨床宗教師の実践理念は、仏教・浄土教の人間理解、死生観、救済観を依りどころとする。如来の大きい慈悲に抱かれ、御同朋として、僧侶が困難にあえぐ人のそばにいて話を聞き、相手の人生の全行程をまるごと認めるところから宗教的ケアが始まる。その意味で、ケアとは、さまざまな面を持つその人の人生の物語をそのままに受けとめることであり、苦境の中で相手が示す優しさや真心に学ぶことである。

また、「すべての者は暴力におびえる」（『ダンマパダ』）、「世のなか安穏なれ、仏法ひろまれ」（親鸞聖人『御消息』）などと説かれるように、仏教を機軸とする臨床宗教師は、非暴力と平和な社会の実現を願う。

前門さまのご著書『愚の力』のお言葉が、被災地や病院において宗教者が実践する際の原動力となっている。「阿弥陀如来の慈悲に救われていると知ったものが、自分の不完全さから目をそらさずに自らできることをする。私の行為が慈悲なのではなくて、阿弥陀如来の慈悲の中で、今何ができるか

ということですが、

聖道の慈悲を『自力』、浄土の慈悲を『他力』といつてもいいのですが、

他力だから何もしないで惰眠を貪っていいわけではありません。不完全な存在であるという自覚のもとにできることからやるのです」「まず自分の愚かさを認めることからはじめないと、現代社会において一切衆生は容易に回復されません」。

ここに親鸞聖人における「常行大悲」の真意が示されている。自己の行為が大悲なのではない。自らの行為の不徹底さを自覚しつつ、如来の大悲に支えられて、自らの覚悟で精いっぱいできることをする、そこに常行大悲の姿勢があるだろう。

至らない自分がそのまま大悲に抱かれている。亡き人から受けた愛情や優しさが死別した後も自分自身の心に生



東日本大震災の被災地を訪ねた時には、多くの方が亡くなった場所で、現地の人たちと共に追悼法要を営んだ

きている。こうした大悲のぬくもりと自己を支えるものとのつながりが自己を突き動かし、限界を知りつつも、なお相手を想う姿勢が生まれてくる。そこに如来の大悲に抱かれた愚者の実践があるだろう。

どうかこれからも東北大学大学院と龍谷大学大学院の連携による臨床宗教師研修を、現場でご尽力されている皆さまにご支援いただけたらうれしい。

講演会・勉強会のご案内

あそかびハーラ病院

緩和ケアレクチャー

時間 18:30～20:00
場所 間法会館3F (西本願寺北隣)
参加費 無料

平成27年

第2回 7月2日(木)

山崎 章郎氏

(ケアタウン小平クリニック院長)

テーマ 在宅ケアとケアタウン小平チームの取り組み

第3回 9月25日(金)

柏木 雄次郎氏 テーマ 未定

(関西福祉科学大学教授・当院顧問)

第4回 11月20日(金)

鍋島 直樹氏

(龍谷大学教授)

テーマ 医療と宗教の融合を目指して

平成28年

第5回 1月22日(金)

荻野 美恵子氏 テーマ 未定

(北里大学医学部神経内科学講師)

第6回 3月18日(金)

河 正子氏 テーマ 未定

(NPO法人緩和ケアサポートグループ代表)

ASO CAFE OPEN

日々思うことを同じナーズたちと語り合いながら学びをシェアできるカフェスタイルの勉強会を開催いたします。

6月24日(水) ホスピスって？

8月26日(水) フィジカルアセスメントって？

10月28日(水) 認知症？それともせん妄？

時間 18:00～
場所 あそかびハーラ病院 ビハーラホール

偶数月の第4水曜日を予定しています。12月は16日、2月は24日を予定しています。ちょっと一息、仕事帰りにカフェに寄る気持ちでお越しいただければと思います。お申込みは不要、参加費は無料です。ぜひお立ち寄りください。



病室 28床

家族室 和室2部屋

ご家族様がお泊まりいただけます

談話室（ファミリーキッチン）

調理器具が揃っており、自由にご利用いただけます

ご家族様の付き添い食も提供いたします（要予約）

浴室（特殊浴室・機械浴室・一般浴室）

付き添いの方もご入浴できます

スタッフ

緩和ケア医 常勤3名 非常勤3名 看護師 約20名

薬剤師1名 管理栄養士1名

看護助手3名 ビハーラ僧3名

ソーシャルワーカー1名 事務5名

交通アクセス



お車の場合

- ①京都から：国道1号線より国道24号線
（京都駅から約1時間）
- ②大阪から：国道307号線を通して
山城大橋を越え、国道24号線を北へ
- ③奈良から：国道24号線を北へ

電車の場合

- ①JR 山城青谷駅下車、徒歩15分
- ②近鉄 新田辺駅より、タクシーで15分
- ③JR 京田辺駅より、タクシーで15分
- ④JR 城陽駅より、タクシーで15分

編集後記

この4月に、あそかビハーラ病院は、緩和ケア病棟の認可を受けました。これもひとえに皆様のおかげであり、改めてお礼申し上げます。

開院以来、数多くの困難に直面しながらではありましたが、大嶋健三郎を院長として迎えて3年、ようやく軌道に乗りつつあります。

これまで数多くの患者さん、そしてご家族のみなさまとお会いをさせていただきました。

そのお一人おひとりとの出会いの中で、ときには笑い、ときには涙し、その笑顔と涙の結晶がこの度の緩和ケア病棟認可につながったものと思います。

これからも質の高いケアの提供を目指し、地域医療の貢献に尽くしてまいります。

今後ともあそかビハーラ病院をよろしくお願い申し上げます。

（花）

ボランティアさんの募集
あそかの一員として活動していただけるボランティアさんを募集しています。活動の内容は、ティーサービス・ガーデニング・生花の手入れ・朗読・アロマセラピーなどがあります。病院ボランティアさんは、ボランティア研修を受講していただく必要があります。ホームページをご覧ください。山本まで直接お電話ください。

相談&各種申し込みは
あそかビハーラ病院電話窓口へ
0774-54-0120

研修・見学をご希望の方
ホームページから見学
申込書をダウンロード
し、ご記入の上、ファックスか、メールでお申し込みください。見学希望日は第3希望まで必ずご記入いただき、ご不明な点はお気軽にお電話ください。